

砦の家

設計:日置拓人+南の島工房

「砦の家」とは

日置拓人 | Takuto Hiki

「砦の家」は、閑静な鎌倉に建つ、老夫婦の住居である。

一般的に高齢者が終の棲家として求めるものは、基本的には自然に囲まれた、安堵感のある住空間であろう。しかし高齢者といえども、絶えず変化する社会・環境に対して積極的にいかかってほしいと思う。そして時には、力強く社会に対して訴えていく姿勢も必要ではないか。「砦の家」は、守ることと同時に、外部の変化に対して自らを変えていくことを意味している。

例えば、東側の屏風の壁はひっそりと竹林に溶け込ませるのではなく、存在を明確にし、絶えず変化する風景に対応するように考えている。壁にちりばめられた無数の赤や灰色の色土は、年月がたつと次第に表情を表す。時には雨で流れて、壁に穴が開いたままになるかもしれないし、時には黒くすんでいくかもしれない。

この家は時間と共に、微妙な変化を表し、そこから生き生きとした空間が生まれる。

住宅のもののづくりの原点を探る

今回のプロジェクトでは、昔ながらの効率の悪い方法で家をつくってみようと考えた。家は、長く使うものであるから、効率良くつくることが必ずしも良い結果につながるとは限らな

い。むしろ、しっかりと、ゆっくりとつくっていくことが重要なのではないかと感じている。

居心地の良い空間とは、現場で細やかなデザインを推し進めることによって生まれるもので、設計者が、どれだけ職人と接するかが重要である。

参加型ものづくり

極端かもしれないが、私は施主も建築家も家づくりに参加しなければいけないと考える。究極的に言えば、誰でも家をつくれることが本来の人間の姿ではないだろうか？ 現在、巨大ホームセンターが郊外に軒並み賑わっている光景を目にすると、自分も家づくりができるのでは…と思う。低迷している経済情勢の中、家は、買うものではなく、つくるものという考えが生まれている。

例えば、この住宅の脱衣室の洗面台では、私たちの事務所が製作した家具に中国産の石板を置き、INAXの「サティス洗面器」を組み合わせたものである。据え置き型の洗面器だからできたコンビネーションである。きっちりとした職人の技と精度の低い手づくりが並ぶ空間は、住宅だからこそできる形ではないだろうか。また、浴室タイルの選定では、目地の色、浴槽の質感が重要であるが、その点、INAX製品は色、形のバリエーションがあり、うまくコーディネートできるのでうれしい。このような作業を通して結果的に愛着の持てる家になっていくのではないだろうか。住宅は、作品でも製品でもない。それは“行為の固まりである”という信念から生まれてくるものかもしれない。



ひきたくと——建築家/1969年生まれ。1993年、早稲田大学工学部建築学科卒業。1995年、イタリア政府給付生ローマ大学建築学部留学。1996年、早稲田大学大学院理工学研究科建設工学修士課程修了。同年、左官職人・久住章氏に師事。1999年、南の島工房設立。2000年、明石高専非常勤講師。2001-04年、明治大学理工学部建築学科兼任講師。2007-10年、早稲田大学理工学部建築学科非常勤講師。主な作品:久住章のゲストハウス1・2[1995・1997]、カフェきょうぶんかん[2004]、INAXライブミュージアム 土・どろんこ館[2006]、桜の家[2009]など。



1——東面全景 | 2——リビング | 3——寝室 | 4——脱衣室の洗面台 | 5——浴室

